

向島

永井荷風

青空文庫

すみだがわ
隅田川

隅田川の水はいよいよ濁りいよいよ悪臭をさえ放つようになってしまったので、その後わたくしは一度も河船には乗らないようになったが、思い返すとこの河水も明治大正の頃には奇麗きれいであつた。

その頃、両国りようこくの川下かわしもには葭簀張よしずばりの水練場すいれんばが四、五軒も並んでいて、夕方近くには柳橋やなぎばしあたりの芸者が泳ぎに来たくらいで、かなり賑にぎやかなものであつた。思い返すと四、五十年もむかしの事で、わたくしもこの辺の水練場で始めて泳ぎを教えられたのであつた。世間ではまだ鎌倉あたりへ別荘を建てて子弟の遊場をつくるような風習がなかった。尋常中学へ這入はいつて一、二年過ぎた頃かと思う。季節が少し寒くなると、泳がないから浅草橋あたりまで行つて釣舟屋の舟を借り、両国から向嶋むこうしま、永代えいたいから品川の砲台あたりまで漕ぎ廻つたが、やがて二、三年過るとその興味も追々他に変じて、一ツ舟に乗り合せた学校友達とも遠ざかり、中には病死したものもあるが、月日と共にその名さえ忘れてしまつて、思出すことさえできないのがある。

その頃わたくしの家は生れた小石川こいしかわから飯田町いいたまちへ越していたので、何かの折、その辺を歩き過る時、ぽつりぽつりと前後なくその頃の事が思い出される。昨夜見た夢を覚め

た後に思返すようなものだ。

浅草も今戸橋場あたりの河岸である。河水に浮べた舟から見ると、別荘のような広い構えの屋敷が幾軒となく並んでいて、いずれも石河岸から流れの上にさんばし栈橋を浮べている。

われわれはそういう栈橋に漕いでいるボートをつないで弁当を食べたり腕のつかれを休めたりしたものであるが、或日或屋敷の栈橋へ出て釣をしている学生を見たが、われわれと年頃が同じくらいなので、一度ならず二度ならず、たびかさな度重るにつれて、別に理由もなく

互に声でもかけ合つて見たいような氣になっていた。する中うち或日の事、学生の釣り上げた

ふな鮒かと思う大きな魚がわれわれのボートに飛び込んだ。学生は大きな声を出してわれわれ

を呼んだ。わたくしはその魚を押えて学生の立っている栈橋へ舟をつけたので、すっかり心安くなり、その後われわれが弁当など食べているのを見たりすると、土瓶どびんに暖い茶を入れて持つて来てくれるようなこともあった。

つきひ月日は過ぎて行く。いつかわれわれは舟遊びにも飽きて舟を借りにも行かなくなつてか

ら、また更に月日がたつ。尋常中学を出て専門の学校も卒業した後、或会社アに雇われて亜米利加メリカへ行った。そして或日曜日の午後ひるすぎ、紐育ニューヨーク中央公園のベンチで新聞を読んでいた時、わたくしの顔を見て、立止ると共にわたくしの名を呼んだ紳士があった。誰あろう。

幾年か前浅草橋場の岸の栈橋で釣をしていたその人である。少年の頃の回想はその時いかに我々を幸福にしたか知れない。

橋場辺の岸から向岸を見ると、帝国大学のペンキに塗られた艇庫ていこが立っていて、毎年堤つみの花の咲く頃、学生の競漕きようそうが行われて、艇庫の上のみならず、そのあたり一帯が競漕を見にくる人で賑かになる。堤の上に名物言問団子めいぶつこといだんごを売る店があり、堤の桜の由来を記した高い石碑が立っていたのも、その辺であつたと思う。団子屋の前を歩み過ぎて、堤から右手へ降りて行くと静かな人家の散在している町へ出る。

西洋から帰つて来てまだ間もない頃のことである。以前日本にいた頃、柳橋で親しくなつた女から、わたくしは突然手紙を貰い、番地を尋ねて行くと、昔から妾しやうたく宅たくなどの多くある堤下の静な町である。

その頃はやつと三十を越すか越さない身の上の事。すぐさま女をさそい出して浅草公園へ夕飯をたべに行つた。女は暫くして曳舟通ひきふねどおりへ引移つたが、いずれにしても山の手から下町へ出て隅田の水を渡つて逢いに行くのがいかにも詩のように美しく思われた。隅田の水はまだ濁らず悪臭も放たず清く澄んでいたので渡船わたしぶねで河を越す人の中には、舷ふなべりから河水で手を洗うものさえあつた。

曳舟まで出て見ると、場末の町つづきになつて百花園ひやつかえんも遠くはない。百花園ほりきから堀切ほりきの菖蒲園しやうぶえんも近くなつて来る。堀切のあたりは放水路の流がまだ出来ない時代には樹木の繁つた間に小川が流れ込んでいた全くの田園で、菖蒲を植えた庭も四、五力処はあつて、いずれも風流を喜ぶ人にはその名を知られていたが、田が埋められて町になると、今では一、二力処しか残つていず、しかも割合に高い入場料をさえ払わねばならないようになつてしまった。

向島も今では瓢箪ひょうたんを下げた風流人の杖を曳く処ではなく、自動車とばを飛して工場の製作物を見に行く処であらう。

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〇五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

向島

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>